

災害保健医療の教育に関する国際ワークショップを開催しました（2016/2/9）

テーマ：一般の保健医療従事者が持つべき災害保健医療のコア・コンピテンシー
会場：東北大学 星陵オーデトリウム（仙台市青葉区）

2016年2月9日（火）に星陵オーデトリウムにおいて、災害科学国際研究所(IRIDeS)災害医療国際協力学分野の主催、東北大学国際大学院コース・ヒューマンセキュリティー、東北医学会の共催により、災害保健医療の教育に関する国際ワークショップを開催しました。このワークショップの目的は、災害保健医療、公衆衛生学、教育の専門家が集まって、災害に強い地域社会をつくるために一般の保健医療従事者が持つべき基本的な能力（コア・コンピテンシー）と現在災害保健医療について行われている教育とのギャップをとらえ、改善することです。

ワークショップは、2015年4月のネパール地震災害および2013年11月のフィリピン台風ハイエン災害に対して災害科学国際研究所が緊急調査を行った際に、保健医療の分野で実際に関わり重要な知見を提供していただいたネパールとフィリピンの医師、1991年に発生したピナツボ火山に最も近いアンヘレス大学の公衆衛生学、帝京大学公衆衛生学、WHO 神戸センター、国立保健医療科学院、日本 DMAT、IRIDeS の研究教育者がそれぞれ災害とそれに関連した教育についてのプレゼンテーションを行ったあとに、ワールドカフェという方法を用いて一般の保健医療従事者が持つべき災害保健医療に関するコア・コンピテンシーについてのコンセンサスを形成するという形で行われました。

冒頭に災害科学国際研究所の奥村誠副所長、医学系研究科の下瀬川徹研究科長、公衆衛生学専攻の辻一郎副専攻長から、東北大学が被災地の中心にある大学として果たす役割、IRIDeS の実践的防災学の樹立と国内外の防災への貢献、公衆衛生学教育の国際化などについて挨拶があり、東北医学会から記念のメダルが海外からの講演者に授与されました。

第1部では、江川新一教授（災害医学研究部門）が仙台防災枠組に沿ったワークショップ開催の意義と、保健医療セクターの内部のみならず、他のセクターとの相互理解と連携の推進、コンセンサス形成の方法に関して説明を行いました。ネパールからは地震災害において保健省が果たした役割と国際医療支援チーム(Foreign Medical Team: FMT)のコーディネート、ネパールにおけるメンタルヘルスケアの現状と課題、災害における被災者および救援対応者のメンタルヘルスについて報告がありました。富田博秋教授（災害医学研究部門）は東日本大震災におけるメンタルヘルスの被害およびわが国における災害精神医療教育について報告しました。

第2部では、桜井愛子准教授（情報管理・社会連携部門）が、教育が防災に果たす役割について、被災地の学校における防災教育、仙台枠組における教育の役割、東日本大震災での教訓、国内外における防災教育支援について報告しました。とくに釜石で中学生が小学生や地域住民を誘って避難し犠牲を免れたことは『奇跡』ではなく『教育の結果』であるとの言葉は印象的でした。

帝京大学から21世紀の医学教育がコンピテンシーに基づくものに変化していること、公衆衛生学が幅広い健康危機に対応するための教育改革を行っていることが報告されました。アンヘラス大学からは、災害が多発するフィリピンにおいて初等教育から高等教育に至るまで防災について組織的に教育されているが、教育者の育成が課題であることが報告されました。WHO 神戸センターからは WHO の健康危機における役割と国際保健人材に求められるコンピテンシーについて報告がありました。

第3部では、国立保健医療科学院から地域の健康を守る保健所長が持つべきコンピテンシーとその法的裏付けについて報告があり、日本 DMAT からは1995年の阪神淡路大震災を契機に設立された日本 DMAT の教育と更新制度、教育の核となるコンピテンシーについて報告がありました。ここでも災害サイクルの各フェーズにおいて対応者の役割が異なることと、一般の保健医療従事者と災害エキスパートとの相互理解の重要性が触れられました。フィリピンからは、台風ハイエンにおけるヘルスクラスターの役割と、災害保健医療従事者が持つべき基本的な能力とし

てリスクの理解と早期警報、IT や GIS などの科学技術の応用力についての報告と、災害時に被災者および対応者の医療安全をどのように考え、最大数の命を救うという観点からどのように医療安全を担保すべきかについて報告がありました。

会場となった星陵オーデトリウムには、東北医学会、ヒューマンセキュリティーコース、医学系研究科の大学院生や教官、ネパールからの留学生、IRIDeSなどの研究者が約70名が参加し、積極的に各演者の発表に対して質問し、またコーヒブレイクの間にネットワークが形成されました。すべての発表が終了したのちに、会場を小会議室に移し、テーブル3卓を囲んでワールドカフェスタイルによる総合討論となりました。じゃんけんでカフェのマスターを決定し、マスター以外のメンバーはテーブルを移動して全く新しい集団として議論が始まります。マスターはもてなしの雰囲気を持ちながら『一般の保健医療従事者が持つべきコア・コンピテンシーとは何か』について、テーブルのなかで自由な討論を勧めます。KJ法を用いて各自が思いつくままに必要なコンピテンシーをタックシールに多数書き出し、似たような意見を分類して、10個以内の項目にまとめていきます。15分でマスター以外は席を変わり、また新しい集団で議論を進め、合計3セッション行ったのちに、マスターからプロダクトとしてまとまった意見を全体に提示してもらいました。

その結果、以下のような項目が一般の保健医療従事者のコア・コンピテンシーとしてコンセンサスを得ました。

- リーダーシップとマネジメント
- チームワーク
- 被災地の文化習慣の尊重
- コミュニケーションと情報や資源へのアクセス
- 災害保健医療の知識（医療安全、メンタルヘルス）
- 自己の身体的・精神的健康管理
- 災害に対する備え

講演者も参加者も最後まで熱心に参加し、ワークショップに対する評価も高いものでした。IRIDeSは災害医学研究部門をもつ世界でもまれなマルチクラスター研究所として、災害医療を担う人材と、一般の医療職との間、保健医療クラスターと他のクラスターの間で相互理解を進めていきます。

文責：江川新一（災害医学研究部門）



奥村誠副所長の Opening Remark



下瀬川徹医学系研究科長の挨拶



辻 一郎 公衆衛生学専攻副専攻長の挨拶



講演者と参加者で和気あいあいと開始



ネパール地震の保健医療対応にあたった
ネパール保健省 Khem Karki 医師



ネパール精神医学会会長の
トリブバン大学精神科 Saroj Ojha 教授



災害時のメンタルヘルスについて講演する
富田博秋教授



防災教育が果たす役割について講演する
桜井愛子准教授



公衆衛生学教育と国際保健について講演する
帝京大学 井上まり子先生



フィリピンの保険医療分野における
防災教育について講演するアンハラス大学
Carmela Dizon 教授



国際保健人材に必要なコア・コンピテンシーに
ついて講演する WHO 神戸センターの
茅野龍馬先生



公衆衛生の法的基盤と保健所長の教育について
講演する国立保健医療科学院の金谷泰宏先生



日本 DMAT の教育について講演する
国立災害医療センターの近藤久禎先生



フィリピンの台風ハイエン災害の医療対応に
ついて講演するフィリピン大学マニラ校の
Teodoro Herbosa 先生



災害時の医療安全について講演するフィリピン大学マニラ校の Armando Crisostomo 先生



『ワールドカフェ』
 マスター以外のメンバーは 15 分ごとにカフェを
 変わり新しいメンバーとリラックスした雰囲気の中
 でプロダクトを作成



各マスターはそれまでの議論をまとめて
 プロダクトの要旨について発表



プロダクトは『一般の保健医療従事者がもつ
 べき災害保健医療のコア・コンピテンシー』
 タックシールにキーワードを書き出し、
 カテゴリーごとにまとめたもの



総合司会をする江川新一教授



最後まで熱心に討論に参加したメンバー